慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「日吉協育モデル」の構築と実践, そして継続 : 羽田功教授が主導した高等学校開設70年事業
Sub Title	Aufbau, Durch- und Fortführung des ,,Hiyoshi-Kyoiku-Modells" : Projekte zur Erneuerung der Keio-Oberschule zum 70. Jahr ihrer Gründung unter Leitung von Professor Isao Hada
Author	古田, 幹(Furuta, Mikio)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.58 (2019.) ,p.163- 180
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	羽田功教授退職記念号 = Sonderheft für Prof. Isao Hada 退職記念に寄せて = Zu Ehren Prof. Isao Hada
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20190331-0163

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「日吉協育モデル」の構築と実践，そして継続
――羽田功教授が主導した高等学校開設70年事業――

古　田　　幹

はじめに

2019年3月，羽田功教授が定年退職を迎えられる。慶應義塾大学経済学部において長きにわたり教育と研究に力を注がれた教授に，心より敬意を表する。また，2013年から2017年まで，慶應義塾高等学校（以下，高等学校）の学校長として積極的に学校運営を担われたことに対し，改めて感謝の意を表したい。

羽田教授が高等学校長として手掛けられた事績のなかでも，とくに高等学校開設70年事業（以下，開設70年事業）は，高等学校にとって大きな意義をもつ。そこで本小文では，教授が高等学校長として主導された開設70年事業について取り上げる。

1．高等学校における開設70年事業

2012年，高等学校は開設70年事業を立ち上げた。そこでは，2018年に迎える高等学校の開設70年を一つの節目と位置付けたうえで，これまでの高等学校を振り返りながら守るべきものは守り，変えるべきものは積極的に変えることで，今後の10年先，20年先をも見据えた高等学校独自の新たな教育スタイルの構築をめざした。

この開設 70 年事業に関わる主要なキーワードを，最初に紹介する。

1. 1 「魅力ある学校」

開設 70 年事業において最初に設定したキーワードが，この「魅力ある学校」である。すなわち，高等学校が今後も「魅力ある学校」であり続けるためには何が必要か，を事業全体の中心軸として設定した。

ここでの「魅力」とは，社会一般から寄せられる評判や評価を意味するものではなく，高等学校の在校生および卒業生による評価，すなわち生徒の立場で「魅力」を感じる学校であること，を想定した。在校生が自己のやりたいことを十分に行い成長していると自覚できる学校，卒業生が自身の人間形成や成長に高等学校での学びや生活が大きく作用していると意識できる学校，それが「魅力ある学校」であると考えた。

ところで，慶應義塾（以下，義塾）は「全社会の先導者たらんこと」を目的に掲げる。つまり，義塾の塾生・塾員にはリーダーたることが求められる。義塾の一貫教育校である高等学校においても，それはもちろん同様である。リーダーとして活躍できる生徒を育むこと，を高等学校はめざす。したがって，高等学校が「魅力ある学校」であること，それは在校生がリーダーに相応しい人間へと成長できる学校であること，卒業生がリーダーとして実際に活躍する学校であること，と同義でなければならない。

これらより，生徒がリーダーへと成長し活躍できる学校，そのことを生徒が自覚し意識できる学校，であることをもって高等学校を「魅力ある学校」と位置付ける。

1. 2 「正統」と「異端（イノベーション）」

高等学校の考えるリーダー，それは時と場所とを問わず社会や時代をリードし得る人間，いわば「グローバルリーダー」と呼び得る人間である。高等学校は，これを「正統と異端（イノベーション）を兼ね備えた人間」と定義した。キーワードは「正統」と「異端（イノベーション）」である。

ここで「正統」とは，高校生として求められる基礎力および人間としての素地，ならびに塾生として身に付けるべき気風（塾風すなわち福澤精神と義塾の教育理念）を修得することをさす。つまり，高校生として，人間として，さらに塾生として，当然に身に付けるべき基盤となる能力，およびバランスのとれた知・徳・体のうえに涵養される社会の一員として生きていくに相応しい人間性，それが「正統」である。

一方「異端（イノベーション）」とは，多様な個性や能力と関心を個人の特性として活かしつつ傑出した才能・技量へとそれを磨き伸ばしていくことをさす。つまり，自らの器量に基づいてより高い次元をめざし挑戦し続ける能力，自らの才能によって事態を突き破り切り拓いていくという意志や新たな世界を生み出し作り上げていくという意欲，そのような能力や意志・意欲のうえに涵養される社会を先導していくに相応しい人間性，それが「異端（イノベーション）」である。高等学校は，この言葉（異端）に敢えてイノベーションという語を与える。それは，既存の枠組みや価値観を超え現状を突破して新たな何かを生み出す力を身に付けた人間こそが社会や時代を変える存在になる，という考えに基づく。

ところで，この「異端（イノベーション）」というキーワードは，福澤諭吉先生の一文に由来する。福澤先生は，『文明論之概略』第一章において，「古来文明の進歩，その初は皆所謂異端妄説に起らざるものなし。」「昔年の異端妄説は今世の通論なり，昨日の奇説は今日の常談なり。然ば則ち今日の異端妄説も亦必ず後年の通論常談なるべし。」と述べている[1)]。ここでの通論・常談とは，世間や社会一般での常識であり通説にあたる。もちろん，常識や通説は社会を生きるうえで不可欠のものであり，その修得なくして人間としての基盤を整えることはできない。人間として当然に身に付けるべきもの，「正統」に通じるもの，それが通論である。ただし，通論のみに拘泥しては新しいものを生み出すことはできない。通論をしっかりと踏まえたうえで，その先に芽吹き成長し結実していく新たなもの，それが社会や時代を

1）『文明論之概略』（岩波文庫）pp. 23 ～ 24 より。

動かす。当初は異端・妄説・奇説とされたものが，やがて評価され社会を動かし時代を進めるきっかけになる。かつて異端とされたものが新たな通論となり，それをベースに新たな異端が生まれ，それが次なる通論となっていく。異端と通論が織りなすサイクル，その無限ともいえる循環が社会や時代に新しいものを生み出し続ける原動力となる。高等学校は，このような異端を，社会や時代の最先端をいく精神と能力，すなわち社会や時代を先導するという意志と技量，新たな社会や時代を生み出すという気概と力量，と理解する。ゆえに，これを「異端（イノベーション）」と読み替える。

「正統」と「異端（イノベーション）」，この両面を高等学校は在校生に，そして卒業生に求める。高等学校の教育がめざす人物像とは，「正統」と「異端（イノベーション）」の双方を身に付けた者，「正統」という基礎・土台を踏まえたうえで「異端（イノベーション）」という個性・能力を発揮できる者，にほかならない。そのような「正統と異端（イノベーション）を兼ね備えた人間」が将来のリーダーたる存在であり，高等学校が求める生徒像となる。

1. 3 「協育」

「正統」と「異端（イノベーション）」の両面を育むために，高等学校は「協育」という新たなメソッドを導入する。生徒同士や生徒と教職員さらに保護者，卒業生をはじめとするさまざまな方々が互いに協力し合い作用し合いながら育むこと，個々の生徒を多くの方々の協力のもとに育むこと，それが「協育」である。

この「協育」は，一方において義塾の教育理念を実践するもの，他方において高等学校の特性を活用するもの，である。前者に関しては，「半学半教」や「社中協力」の精神を盛り込んだ教育，といえる。後者に関しては，大規模校であるがゆえに確保される多様な生徒・教職員・卒業生の存在を活かした教育，日吉キャンパスに所在するがゆえに可能となる慶應義塾大学（以下，大学）の学部や大学院研究科などとの連携および近隣の地域社会との関係を活かした教育，ということができる。

義塾の教育理念のもと，高等学校に関わるさまざまな方々の協力を得て展開する「協育」，それは高等学校が「魅力ある学校」であり続けるために必要となる独自の教育メソッドである。

2.「日吉協育モデル」の構築

「魅力ある学校」であり続けるために，高等学校は「正統と異端（イノベーション）を兼ね備えた人間」の「協育」をめざす。この取り組みを「正統と異端（イノベーション）の協育」と呼び，これに「日吉協育モデル」という名称を与える。

2. 1 「日吉協育モデル」とは

「日吉協育モデル」の構築と実践，それは開設 70 年事業全体を統合するコンセプトであると同時に，高等学校のみならず日吉キャンパスさらには義塾全体にも関わる新たな教育モデルの確立を意図したものである。

高等学校が日吉キャンパスを舞台として「協育」を軸に切り拓く新たな教育のモデル，それゆえにこれを「日吉協育モデル」と名付ける。

2. 2 「日吉協育モデル」構築の前提

「日吉協育モデル」による「正統と異端（イノベーション）の協育」は，高等学校が有する三つの特性を前提とする。

(a)　生徒総数 2,200 名を超える大規模な学校であること

特性の第一に，高等学校は大規模な男子校であることが挙げられる。一学年約 740 名，全校生徒約 2,200 名からなる学校であり [2]，専任および非常勤あわせて約 200 名の教職員が生徒を見守る学校である。さらに，52,000 名を超す卒業生を有する学校でもある。

2）ただし，高等学校の学則上の定員は，一学年 810 名，全校生徒 2,430 名である（「慶應義塾高等学校学則　第 13 条」『慶應義塾諸規程集（2018 年 4 月 24 日現在）』慶應義塾総務部編，2018 年，p.362）。

このような大規模校であるがゆえのメリットは，きわめて大きい。例えば，生徒の多彩な個性と多岐にわたる関心や能力・技量は，高等学校における教育活動の多様な在り方を可能とする。また，それを支えるものとして，高い専門性を有する多くのスタッフが存在し，さらに生徒やスタッフをさまざまにバックアップし得る多くの卒業生がいる。これらゆえに，高等学校は同質性の強い集団というよりも多様性の著しく高い集団としてある，といってよい。

大規模校であるがゆえの，多彩な人材に裏打ちされた多様性，それが高等学校の第一の特性である。

(b)　義塾の一貫教育体系を構成する学校であること

高等学校の多様性は，大規模校であると同時に義塾の一貫教育校の一つであることも，大きく作用している。高等学校への入学には，五つの受入口がある。慶應義塾普通部からの進学者（約 230 名），慶應義塾中等部からの進学者（約 130 名），一般入試による入学者（約 300 名），帰国生入試による入学者（約 30 名），推薦入試による入学者（約 40 名），の五つである。これらの新入生は，入学後には可能な限り均等な割振りとなるよう 18 クラスに編成される。このような五つの受入口とクラス編成の在り方が，生徒の多様性を保障し，また助長していくといってよい。異なる受入口によることで，異なるバックグラウンドをもち異なる能力をもつさまざまな生徒が高等学校の構成メンバーとなる。それらの多様な個性が融合し互いに刺激し合うことによって，高等学校の生徒にはさらにそれぞれの個性を伸長する機会が提供される。

また，一貫教育校であることによって，生徒は自己の興味・関心や能力を伸ばすことに在学中の時間の多くを充てることが可能となる。生徒の多様性を抑制することなく自由にそれを伸ばし深めていくことが可能な学校として，高等学校はある。自身の好きなことに集中し専念し没頭することのできる環境，それが生徒の個性をいっそう伸ばし深めることは，いうま

でもない。

義塾の一貫教育校であること，それが高等学校の特性の第二である。

(c) 日吉キャンパスに所在する学校であること

日吉キャンパスは，地域に広く開かれたキャンパスであること，義塾の一貫教育の中等教育段階と高等教育段階とが共存するキャンパスであること，をその特徴とする。前者については，イチョウ並木や日吉競技場周辺の光景が物語るようにキャンパス内各所が地域住民の生活圏の重要な一部となっていることに象徴される。通勤・通学や買い物のために行き交う方々，散歩や散策を楽しむ親子連れや園児の姿，並木において銀杏を拾う方々や黄葉を愛で写真を撮る方々など，日吉キャンパスは近隣の住民の生活と広く深いつながりを有する。また後者について，日吉は慶應義塾普通部や高等学校，大学（学部の第1学年または第1・2学年）という義塾の基礎教育・教養教育の拠点であると同時に，さらに義塾の大学院（経営管理研究科，システムデザイン・マネジメント研究科，メディアデザイン研究科）と研究センター・研究所（教養研究センター，外国語教育研究センター，GIC センター，自然科学研究教育センター，デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター，体育研究所，スポーツ医学研究センター，保健管理センターなど）が存在し，いわば基礎教育・教養教育を土台とした総合的な教育・研究キャンパスといい得る。日吉キャンパスは，周辺地域に向けられた開放性やキャンパス内部の教育環境の配置状態を考えた場合，きわめて大きな総合性を有しているのである。

そのような日吉キャンパスに高等学校は所在する。キャンパス自体と同様，独自の校門や塀をもたない高等学校は，それゆえキャンパス内外の各所と自由につながりをもつことができる。それは空間として可能であるのみならず，個別の教育活動においても各所との積極的な協力と提携が可能であることを意味する。日吉キャンパスに所在する学校であるがゆえに形成し得るさまざまなつながり，それが高等学校の第三の特性である。

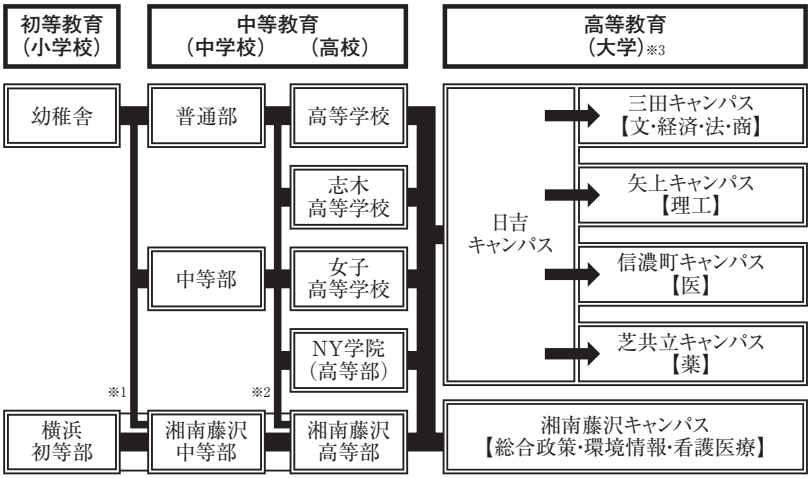

図　慶應義塾における一貫教育の流れ

※1：幼稚舎から湘南藤沢中等部への進学は，2019 年度から人数を制限
※2：普通部・中等部から湘南藤沢高等部への進学は，2022 年度から人数を制限
※3：高等教育については，キャンパスごとに学部名を略式で記載し大学院は省略

2. 3 「日吉協育モデル」構築の意義

これら三つの特性のもとに構築される「日吉協育モデル」が有する意義について，義塾の教育体系における日吉キャンパスの位置付けならびに高等学校のはたす役割という観点から，さらに述べる。

(a)　日吉キャンパスの位置付け

義塾の教育体系（一貫教育）は，現在，図示したように整備されている[3)]。この体系は，とくに初等・中等教育段階である一貫教育校（小学校・中学校・高校）と高等教育段階である大学 10 学部との接続に関して，大

3）図中においては，大学各学部の名称を略式にて記載（例えば文学部は文と表記）した。また，各一貫教育校の学校名は，すべて慶應義塾を省略して記載（例えば慶應義塾志木高等学校は志木高等学校と表記）した。なお，一貫教育校名については，以下の本文中においても同様に表記している。

きな特徴を有する。それは，10 学部のうち 7 学部は 1 年間ないし 2 年間を必ず日吉キャンパスで学ぶが，残る 3 学部は湘南藤沢キャンパスでの学びを主体としており日吉キャンパスで学ぶことがない，という点である。

義塾の一貫教育校に在学する児童および生徒は，その中等教育段階（中学校・高校）での学びを日吉・志木・三田・湘南藤沢・ニューヨークという各地区で終えて高等教育段階（大学）へと進学するにあたり，学部に応じて日吉キャンパスまたは湘南藤沢キャンパスのいずれかに進む。もちろん，大学各学部の入学試験を経て義塾へ入学する学生も，日吉キャンパスと湘南藤沢キャンパスのいずれかにおいて塾生としての第一歩をしるす。

日吉キャンパスで大学生活を開始した学生は，第 1 学年または第 1・2 学年を終えた後，それぞれが所属する学部に応じて三田キャンパス（文学部・経済学部・法学部・商学部），矢上キャンパス（理工学部），信濃町キャンパス（医学部），芝共立キャンパス（薬学部）へと進む。つまり，日吉キャンパスから 4 キャンパス 7 学部へと「拡散」していく。

一方，湘南藤沢キャンパス（総合政策学部・環境情報学部・看護医療学部）で大学生活を開始した学生は，基本的に在学 4 年間すべてをそのまま同キャンパスにおいて学ぶ[4)]。

このような大学における学びの空間の二区分，日吉キャンパスと湘南藤沢キャンパスという二大別を，それぞれに在籍する学生数から比較すると，日吉キャンパスで学ぶ 7 学部の入学定員が合計 5,455 名であるのに対して湘南藤沢キャンパスで学ぶ 3 学部の入学定員は合計 950 名となる（2018 年現在）[5)]。大学に入学した学生の約 85％は日吉キャンパスにおいて学び，約 15％は湘南藤沢キャンパスにおいて学ぶ（すなわち日吉キャンパスで学ぶことがない）ということになる。

4）ただし，看護医療学部については，第 3 学年を信濃町キャンパス，第 4 学年を湘南藤沢キャンパスと信濃町キャンパスの双方，でそれぞれ学ぶ。

5）「慶應義塾大学学部学則　第 157 条」『慶應義塾諸規程集（2018 年 4 月 24 日現在）』慶應義塾総務部編，2018 年，pp.149 ～ 150。

これを前提として義塾の教育体系における日吉キャンパスの位置付けを考えると，ここは大学において学ぶ塾生のうち約 85％がいったん「集約」する場であり，そしてそこから改めて各キャンパス・各学部へ「拡散」していく場である，ということができる。塾内の一貫教育校より，また塾外のさまざまな高校より，多くの学生が「集約」し「拡散」する，という「ハブ」的な役割を日吉キャンパスははたすのである。

それゆえ，「集約」の場であり「拡散」の起点である日吉キャンパスにおいて新しい教育を展開することは，当然のことながら，義塾の教育に大きな影響と刺激を及ぼすことにもなる。このように位置付け得る日吉キャンパスだからこそ有効性を発揮する教育モデルとして，「日吉協育モデル」はある。

(b)　高等学校のはたす役割

まず，一貫教育校の出身者（塾内進学者）が義塾内においてはたす役割を考える。

義塾の一貫教育は「同一の中の多様」と表現される。「同一」とは福澤先生の唱えた精神および義塾の掲げる教育理念，「多様」とは各一貫教育校の有する個性や独自の教育目標・カリキュラムなど，をさす。それぞれの学校は，独自の特色である「多様」を保持しつつも，児童・生徒が福澤精神や義塾の理念を身に付ける「同一」をめざすという点において共通する，それが義塾の一貫教育である。一貫教育校の児童・生徒が「同一」として身に付けるもの，それは義塾の気風と呼ぶことができる。各教育段階（各校）に相応しい内容の気風を身に付けた児童・生徒が次の段階（学校）へと進む，それが義塾の一貫教育体系である。それでは，入学試験に合格して新たに義塾の一員となる生徒・学生（塾外入学者）に対して，塾内進学者はどのような役割をはたすのであろうか。義塾の気風を身に付けた存在として塾外入学者に塾生の模範を示すこと，これが塾内進学者のはたす役割と考える。同学年・同年齢ではあっても先輩塾生として，新たに

義塾へ加わった生徒・学生に模範を示すこと，それは「半学半教」の精神にも通じるものといえる。

これを踏まえるならば，一貫教育における高等学校の役割は，大学からの塾外入学者に対し塾生として模範となる人間を育むこと，それに相応しい義塾の気風を身に付けた人間を育み大学へと送り出すこと，にあるといえる。もちろん，これは高等学校のみがはたす役割ではなく，すべての一貫教育校（高校）が担うべきものである。しかし敢えて，その主たる役割は高等学校が担う，としたい。

その理由は，高等学校の特質，とくにその規模，歴史，立地にある。

まず，規模について。高等学校の生徒数は，義塾の一貫教育校（5 高校）中において他校を大きく上回る。各校の学則定員を比較すると，高等学校 2,430 名（一学年あたり 810 名），志木高等学校 750 名（同 250 名），女子高等学校 576 名（同 192 名），湘南藤沢高等部 720 名（同 240 名），NY 学院（高等部）420 名（高校 3 年生に相当する第 12 学年は 120 名）となる（2018 年現在）[6]。ここに明らかなように，大学への塾内進学者数（5 高校合計で 1,612 名）に占める高等学校出身者（810 名）の比率は 50％を超えるのであり，大学からの塾外入学者に対して高等学校の卒業生が及ぼす影響は他校に比べ明らかに大きい。

次に，歴史について。高等学校は，義塾の旧制普通部および商工学校ならびに大学予科の伝統を継承するものとして開設された。したがって，その当初より中等教育と高等教育の両段階に通じる学校として大学における塾生の模範たるべきとの意識を強く有する。

さらに，立地について。高等学校は日吉キャンパスに所在する。それゆ

6）「慶應義塾高等学校学則　第 13 条」『慶應義塾諸規程集（2018 年 4 月 24 日現在）』慶應義塾総務部編，2018 年，p. 362；「慶應義塾志木高等学校学則　第 4 条」同，p. 370；「慶應義塾女子高等学校学則　第 4 条」同，p. 380；「慶應義塾湘南藤沢高等部学則　第 4 条」同，p. 393；「慶應義塾ニューヨーク学院（高等部）学則　第 4 条」同，p. 443。

え，生徒は在学する 3 年間を大学からの塾外入学者と同じ環境で学び過ごすという立場にいる。また，同キャンパスにおいて塾外入学者である学生よりも早くかつ長く義塾の気風に触れる存在としてある。それゆえに，同キャンパスでの塾外入学者の模範として当然に機能すべき立場にある。なお，この点について，湘南藤沢キャンパスでは同様の立場を湘南藤沢高等部が有しており，そこでの模範の主体は湘南藤沢高等部が担うべきと考え得る。ただし，先述の通り，大学入学者数（入学定員）において日吉キャンパスは全塾生の約 85%，湘南藤沢キャンパスは約 15%，がそれぞれ学ぶ場であり，ゆえに日吉キャンパスにおける先輩塾生たる高等学校の生徒（その卒業生）が義塾に及ぼす影響は，湘南藤沢高等部のそれに比較してはるかに大きい。

以上より，敢えて，大学進学時における塾生としての模範（塾外入学者に対して模範となる存在）の主体を担うべきは高等学校の出身者と考える。義塾の一貫教育において高等学校がはたす役割，それは塾生としての模範を示す人間（義塾の気風を身に付けた人間）を大学へ送り出す主体を担うことにある。

(c)「日吉協育モデル」の意義

義塾の一貫教育体系における日吉キャンパスの位置付けならびに高等学校のはたす役割，それらを踏まえることによって「日吉協育モデル」の意義は，より明瞭になる。「日吉協育モデル」の構築，それは単に高等学校において新たな教育スタイルを作り上げる，というだけのものではない。高等学校という枠組みを超えて，日吉キャンパスさらには義塾全体へと大きな影響を及ぼすもの，それが「日吉協育モデル」である。

高等学校における新たな教育の取り組み，それは日吉キャンパスに所在する学校であるからこそ可能かつ有効なものであり，また，それによって高等学校のみにとどまらず日吉キャンパスを変えるものでもある。さらに，日吉キャンパスを変えることとは義塾全体を変えることにも通じる。「日

吉協育モデル」の意義は，まさにそこにある，といってよい。その構築によって，高等学校はもちろんのこと，日吉キャンパスさらには義塾の教育活動全体をも変えていこうとする試み，それが高等学校の掲げる「日吉協育モデル」である。

3.「日吉協育モデル」の実践，そして継続

ここでは，「日吉協育モデル」の実践と継続のため高等学校が具体化した三つについて，紹介する。

3.1　協育施設――日吉協育棟――

高等学校の教育活動を支える既存の諸施設のなかでも，第一校舎は日吉キャンパス開設の当初から存在する建物である。この校舎は，日吉キャンパスの歴史と伝統の象徴であり，高等学校のシンボルでもある。そして，ここで展開される教育活動は人間としての素地を形作るものとして，まさに「正統」を育むものと位置付け得る。その意味において，第一校舎をはじめとする既存の高等学校施設が「日吉協育モデル」にはたす役割は，もちろん非常に大きい。

ただし，これらは既存のものであるがゆえに，新たな教育メソッド「協育」に機能面で適合しない部分がある。また，多様な「異端（イノベーション）」を育むうえで求められる使用上の自由度に関しても十分とはいい難い。そのために，「日吉協育モデル」を実践するに相応しい場，「協育」を具体化するための拠点として，2018 年度，新たに「日吉協育棟」を竣工した。

従来の HR 教室や特別教室とは異なる，新たな学びの空間としての「日吉協育棟」。その延床面積は約 5,800 ㎡，建物は蝮谷に面する「創造館」と既存の第一校舎・特別教室 A 棟・同 B 棟に接続する「交流館」の二棟をブリッジでつなぐ構造をとる。

この「日吉協育棟」は，高等学校における知的・人的交流を促す空間として機能する。すなわち，書物をはじめとする種々のメディアを通じて古

今の蓄積された知と出会う場として，生徒同士や教職員にとどまらず卒業生や大学の学生・教職員，地域の方々や留学生といった同時代を生きる多様な人間と出会いつながる場として，この施設は機能する。

また，知的・人的交流を通じて多くを受信するのみならず，それらに基づいて自ら考え自らの意見をまとめそれを形にして発信する，そのような施設としても機能する。

これらの機能を具体的に確保するため，「日吉協育棟」には以下の諸室を配置した。

知と出会う場
　図書室
人と出会いつながる場
　協育ラウンジ，コミュニケーションラウンジ
　ビブリオラウンジ，アーカイブ，和室
出会いやつながりで得たものを自ら深め創造し発信する場
　セミナールーム，メディアスタジオ，クリエイトラボ
　日吉協育ホール
健全な心身を育成する場
　保健室，相談室，面談室，トレーニングルーム

この建物は，生徒が自らの力で，また周囲からのサポートを得ながら，その知的・人的な交流を拡大し活用し自らの成長の糧にする場である。また，想像力と創造力を駆使しながら生徒が新たな「知」を生み出し拡げていく場となる。そこでは，「正統」を育むことはもちろんのこと，さらに「異端（イノベーション）」の芽を積極的に育み伸ばし磨くことも強く期待できる。さまざまな知的・人的交流を通じて「正統」と「異端（イノベーション）」を育む場，まさに「協育」の拠点として「日吉協育モデル」を実践する場，それが「日吉協育棟」である。

3. 2 協育プログラム

高等学校における教育活動の基本的な枠組みは，なによりも「教育課程表」に基づいて整備される。在学 3 年間で必修科目や選択必修科目・選択科目として何を修得するのか，三つの学年にどのような科目を何単位で配置するのか，というコアのカリキュラムがそれであり，授業時間内に行われるこれらは主として「正統」を育むものとなる。

一方，授業外として行われる教育活動（特別教育活動や課外活動）については，例えば生徒会活動や文化系・体育系のクラブ活動，各種の講演会や講座，交流会など，個々の生徒が自己の興味・関心や能力に応じて自主的に参加するものとなる。これらは，そこでの人間性の涵養という点においては「正統」を育むことにも通じるが，個々の能力を個別に伸長するという点では「異端（イノベーション）」を育むことに相当する。

高等学校は，そのような授業時間内（正課）あるいは授業時間外（課外）における教育活動について，とくに「日吉協育モデル」を実践するための新たな試みに該当するものを「協育プログラム」と呼称する。「正統と異端（イノベーション）を兼ね備えた人間」の「協育」をなすために高等学校が独自に開設し展開するもの，それが「協育プログラム」である。これらは，その名の通り，義塾の大学・大学院や研究センター，塾外の研究機関，法人，高等学校の同窓会（卒業生）や生徒会・有志生徒などの協力のもとに行われる。

2018 年度までに高等学校が実施した主な「協育プログラム」は，次の通りである。

義塾の大学・大学院および研究センターの協力によるもの

「理系ノスヽメ」【各学部・各研究科との連携】

「法律学」【法科大学院（ロースクール）との連携】

「日吉学」【教養研究センターとの連携】

「ドイツ語による学校紹介」【外国語教育研究センターとの連携】

研究機関（塾外）の協力によるもの

「慶應科学講演会」【JAXA 宇宙科学研究所との連携】

「国立天文台三鷹キャンパス見学会」【国立天文台との連携】

法人の協力によるもの

「リポビタン D マーケティング実践講座」【大正製薬との連携】

「“食と健康”講座」【グリーンハウスグループとの連携】

「減災学講座：減災学のスゝメ」【ジオ・サーチとの連携】

「講演会：拘りの技術が明日を切り拓く」【TOTO との連携】

高等学校同窓会の協力によるもの

「将来展望講座：塾高での学び－社会での仕事」

「“公認会計士”入門講座」

「保護者対象“公認会計士”特別講演プログラム」

高等学校生徒会または有志生徒の協力によるもの

「異端のすゝめ：真の一流になるために」

「塾高生に薦める図書 220 選」

「TEDx Keio High School」

「地下壕見学会」

また，国際交流の拡大や多文化理解の深化，国際感覚の涵養と修得をめざして，海外の提携校との間で短期交換留学プログラムを実施している。2018 年度現在の提携校は，

King’s College School（英国ロンドン）

The Bolles School（米国フロリダ州）

St. John Bosco High School（米国カリフォルニア州）

の 3 校である。さらに，海外から留学生を招き生徒との交流をはかるプログラム，

Keio Senior High School Summer Program

を高等学校主催として 2018 年度に試行した。

その他，「協育プログラム」に欠かせない存在である卒業生に対し，高等学校への関心を高めていただくことを目的に「塾高ホームカミングデイ」懇親会を実施している。あわせて，高等学校に関わる卒業生の記憶や過去の記録を収集し保存さらに開示・活用するために，アーカイブ・プロジェクトを立ち上げて「日吉協育棟」内に展示スペースを設けた。

3. 3　協育基金・資金

「日吉協育モデル」の実践には，その継続性を保証するための財政基盤の確立が不可欠となる。「日吉協育モデル」の維持と継続を確実なものとするために，その安定的な運営を可能なものとするために，2018 年度，高等学校は独自の基金・資金を設立した。「慶應義塾高等学校グローバルリーダー協育基金・資金」（略称「協育基金・資金」）である。

この「協育基金・資金」を活用することで，「協育」に関わるさまざまな活動を持続的に展開し得る体制を整える。「協育基金・資金」の活用項目は，主に以下の通りである。

講演会・講座などの開発および運営に必要な諸経費
国際交流・多文化理解活動に必要な諸経費
国際交流・多文化理解活動に参加する生徒への奨学金
アーカイブ・プロジェクト活動に必要な諸経費

なお，この「協育基金・資金」の活用の一環として，高等学校独自の奨学金「慶應義塾高等学校グローバルリーダー奨学金」を設ける。高等学校が主催する海外留学プログラムに参加する生徒へこの奨学金を給付することで，国際交流や多文化理解に関する機会への積極的な参加を後押しする。

4. 高等学校から描く日吉キャンパスの未来

「日吉協育モデル」がめざすもの，それは高等学校が有する特性および日吉キャンパスが有する総合性を活かした独自の教育モデルの創造と展開にほかならない。

「日吉協育モデル」の構築と実践，そして継続。それによる「正統と異端（イノベーション）を兼ね備えた人間」の「協育」。高等学校が切り拓くこの新たな教育モデルは，先に「日吉協育モデル」の意義として述べた通り，高等学校のみならず日吉キャンパスさらには義塾全体に対して大きな影響を及ぼす。

そのような「日吉協育モデル」のもとに高等学校から描く日吉キャンパスの未来，それは義塾全体に関わる教育の刷新を主体的に担う存在として日吉キャンパスが機能する，という姿にほかならない。日吉キャンパスが変われば義塾が変わる，その起点として「日吉協育モデル」がある。日吉キャンパスの未来を，このような気概のもとに具現化したい。

おわりに

羽田教授が主導された開設 70 年事業，そこで掲げられた「日吉協育モデル」。

高等学校が日吉キャンパスから発信する新たな教育のモデルとして，教授は「日吉協育モデル」の具体化をめざされた。義塾の教育活動において日吉キャンパスがはたす役割の重要性を，教授は深く認識されていた。それゆえ，学部という枠組みを超えて義塾全体に大きな刺激を与えるために，日吉キャンパスから新たなモデルの発信を試みた。それは，義塾の教育そのものに対する問題提起であり挑戦でもあった。

そのような「日吉協育モデル」を，高等学校は積極的に実践し継承していくべきと考える。「日吉協育モデル」のもとで，高等学校が，日吉キャンパスが，さらには義塾が，どのように変わっていくか。それを羽田教授がいつまでも見守ってくださることを，強く願う。